

「暴風に襲われる」

2016年10月06日

使徒言行録 27章 13節～26節 ときに、南風が静かに吹いて来たので、人々は望みどおりに事が運ぶと考えて錨を上げ、クレタ島の岸に沿って進んだ。しかし、間もなく「エウラキロン」と呼ばれる暴風が、島の方から吹き降ろして来た。船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができなかつたので、わたしたちは流されるにまかせた。やがて、カウダという小島の陰に来たので、やっとのことで小舟をしっかりと引き寄せることができた。小舟を船に引き上げてから、船体には綱を巻きつけ、シルティスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて海錨を降ろし、流されるにまかせた。しかし、ひどい暴風に悩まされたので、翌日には人々は積み荷を海に捨て始め、三日目には自分たちの手で船具を投げ捨ててしまった。幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた。

人々は長い間、食事をとっていなかった。そのとき、パウロは彼らの中に立って言った。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいありません。しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです。」

パウロたちを乗せた船はクレタ島の中部の「良い港」に着いた。パウロは地中海の冬の嵐が来る危険な季節になっているから留まるようにと警告したが、船長たちは冬を過ごすには、島の南西にあるフェニクス港が良いと考えた。南風が静かに吹いた時、大丈夫と判断し、錨を上げ、クレタ島の岸に沿って、フェニクス港に向かった。ところが、「エウラキロン」と呼ばれる暴風が島の方から吹き降ろして来た。船は航行することができなくなり、流されるままになった。カウダという小島の影に来たので、小舟を引き寄せ、船に引き上げ、巻き付けた。小舟は船が沈没した時の救命ボートである。浅瀬に乗り上げることを恐れ、海錨を降ろし、流されるに任せた。海錨とは、船首を常に風上に向け、海流に流されないようにする防流錨である。しかし、暴風が続くので、船を軽くするために積み荷を海に投げ始め、3日目には、船具も投げ捨てた。幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が吹き荒れたので、乗船者たちは助かる望みを全く失いそうになっていた。人々は恐怖と絶望の中で、食事をとることもできなくなった。その時パウロは、「皆さん」と呼びかけた。私が警告したようにしたならば、このような危険や損失を避けられたに違いない。しかし今、あなた方に勧める。船は失うが、皆さんの誰一人として、命を失う者はいない。私が仕え、礼拝している神からの天使が昨夜、傍に立って、「パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ」と言われた。だから、皆さん、元気を出しなさい。私は神を信じている。私に告げられたことは、その通りになり、どこかの島に打ち上げられる。パウロは生きる望みを失った人々に自分たちは神の守りの中にあると訴え、励ました。